

細胞転写法が有用であった 乳房転移をきたした肺腺癌の一例

株式会社 秋田病理組織細胞診研究センター

○両角 敬史 阿部 一之助 齊藤 千佳

及川 守康 金子 翔 阿部 博之 杉山 達朗

※この演題発表に関して開示するCOIはありません。

【 はじめに 】

乳腺において、他臓器からの転移は稀とされており、その頻度は全乳癌の0.5~2.0%と報告されている。乳房転移の原発巣としては悪性リンパ腫、白血病、胃癌の順に多く、肺癌の乳房転移に関する報告は少ない。

今回我々は術後3年で乳房転移をきたした肺腺癌の診断に対し、細胞転写法が有用であった症例を経験したので報告する。

【 症 例 】

〔 患 者 〕 80歳 女性

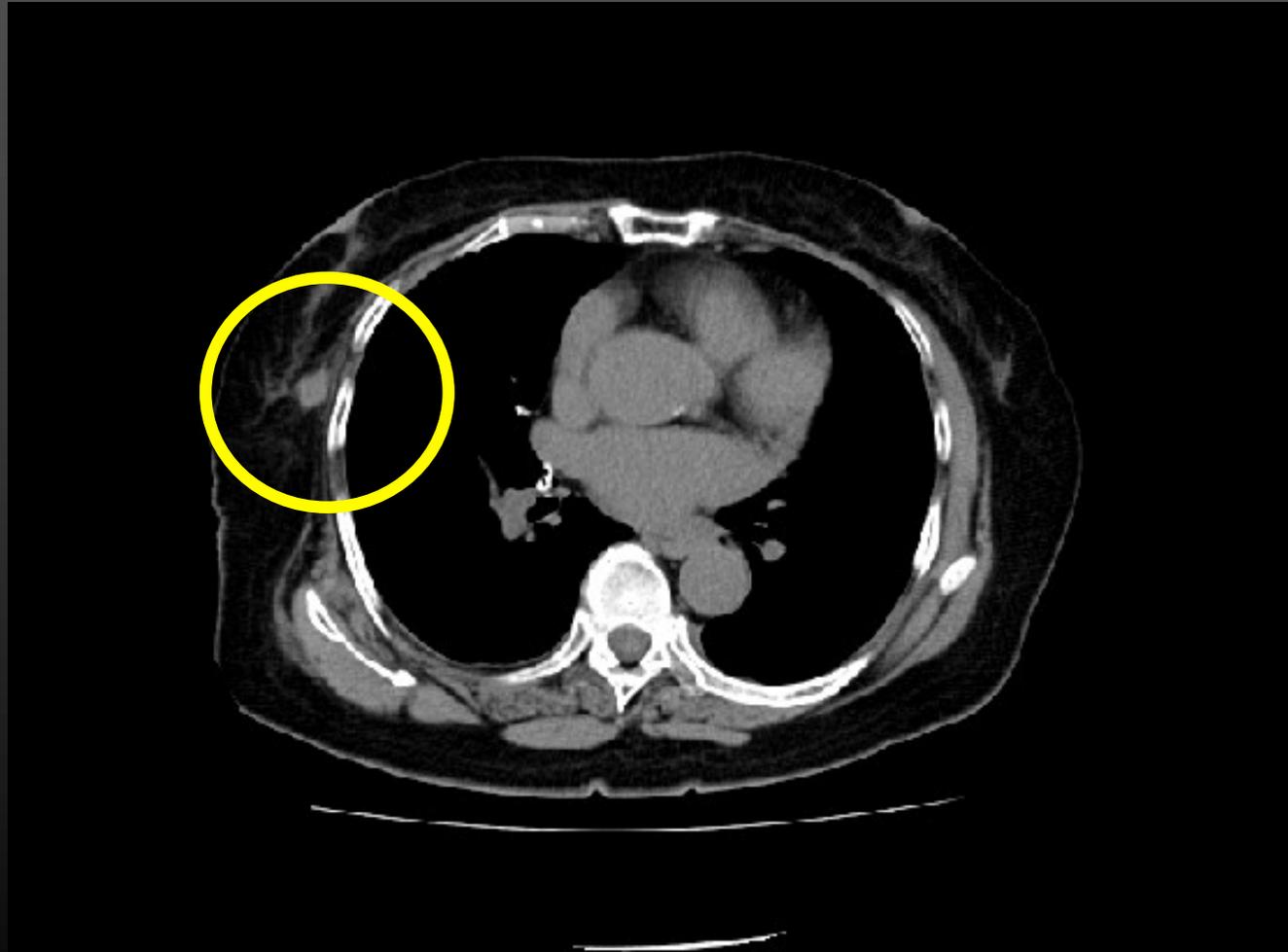
〔 既 往 歴 〕 2007年 大腸カルチノイド
 2010年 肺腺癌

〔臨床経過〕 2015年4月、肺腺癌術後の経過観察
 中に右乳腺CD領域境界部に約1cm大の
 腫瘍を認め、穿刺吸引細胞診を施行

【血液学的所見】

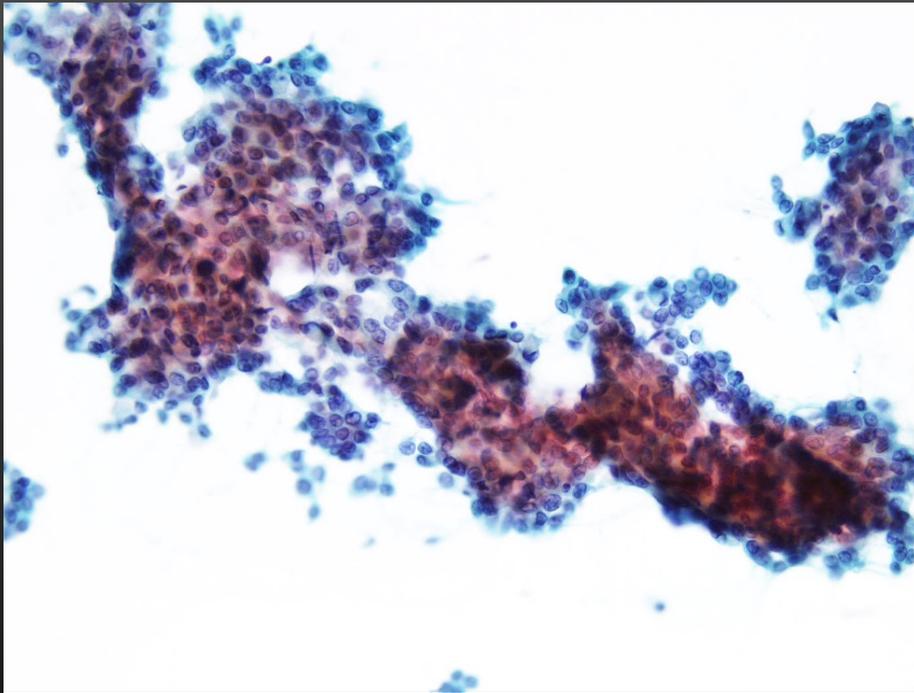
項目	基準値	検査値	単位		項目	基準値	検査値	単位	
白血球	3,500~9,100	4,900	/ μ l		総蛋白	6.5~8.2	6.1	g/dl	L
Neutro	28~72	64.2	%		総ビリルビン	0.2~1.2	0.4	mg/dl	
Lymph	18~58	25.6	%		AST(GOT)	10~40	5	IU/L	
Mono	0~12	7.9	%		ALT(GPT)	5~40	11	IU/L	
Eosino	0~8	1.9	%		LDH	106~211	183	IU/L	
Baso	0~3	0.4	%		ALP	104~338	178	IU/L	
					AMY	42~158	50	IU/L	
赤血球	376~500	392	万/ μ l		BUN	8~20	20.7	mg/dl	H
ヘモグロビン	11.3~15.2	12.1	g/dl		クレアチニン	0.4~1.1	0.7	mg/dl	
ヘマトクリット	33.4~44.9	36.0	%		尿酸	2.5~5.4		mg/dl	
MCV	79.0~100.0	92	fL		ナトリウム	134~147	141	mEq/l	
MCH	26.3~34.3	31.0	pg		カリウム	3.7~5.0	4.0	mEq/l	
MCHC	30.7~36.6	33.7	g/dl		クロール	96~110	110	mEq/l	
					カルシウム	8.2~10.8	8.4	mEq/l	
血小板	13~36.9	14.3	万/ μ l		CEA	~5.0	3.3	NG/ML	
					SLX	~38.0	28.4	U/ML	
					CRP定量	~0.19	0.02	mg/dl	

【CT画像】

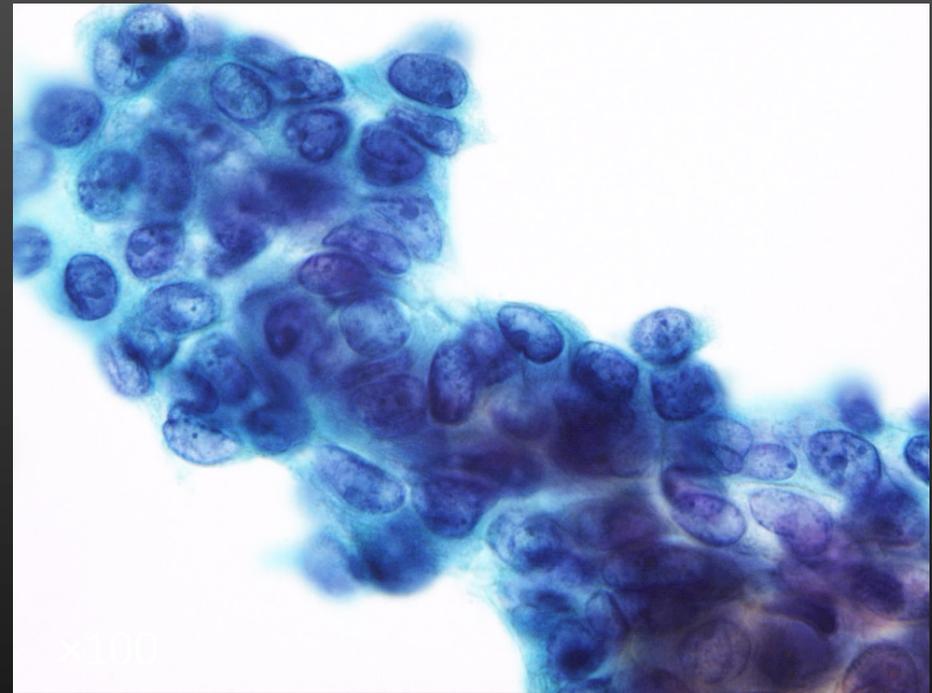


右乳房のC領域に14×11mm大の腫瘤を認めた

【細胞像】



不規則な重積性を示す大きな集塊



核大小不同や核形不整、
核クロマチン増量を認める

【 細胞転写法 】

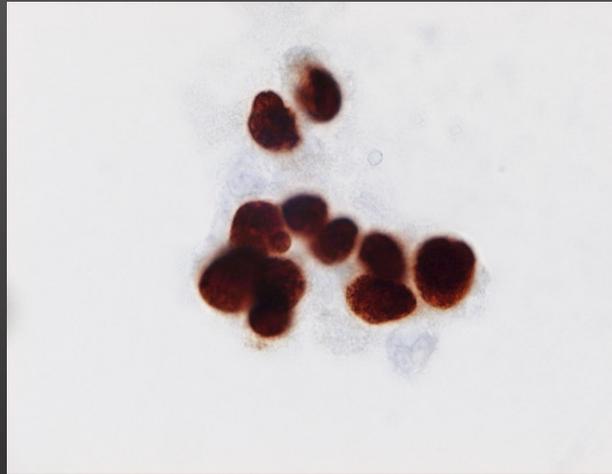
スライドガラス上に塗抹されている全ての細胞を1枚のシートとして剥離した後、標的とする細胞集塊をトリミングし、別のスライドガラス上に貼付する方法



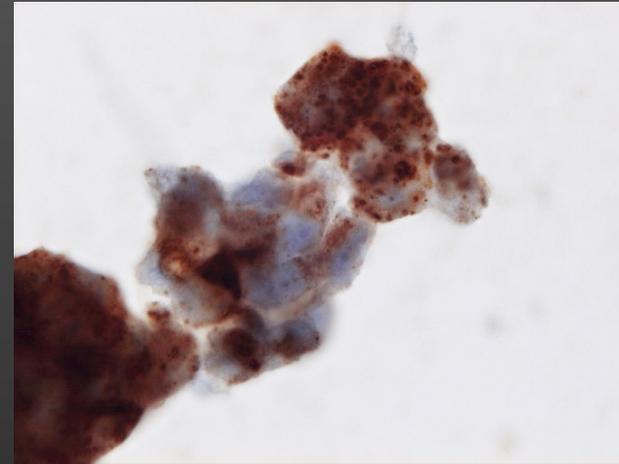
【 細胞転写法の利点 】

- 目的とする細胞を明確に判定できる
- 細胞量が少量でも検査が可能である
- 1枚の標本から多数の標本を得ることができ、
数種類の染色が可能
- *in situ* hybridization (ISH) および
Fluorescence *in situ* hybridization (FISH) や
電子顕微鏡への応用も可能

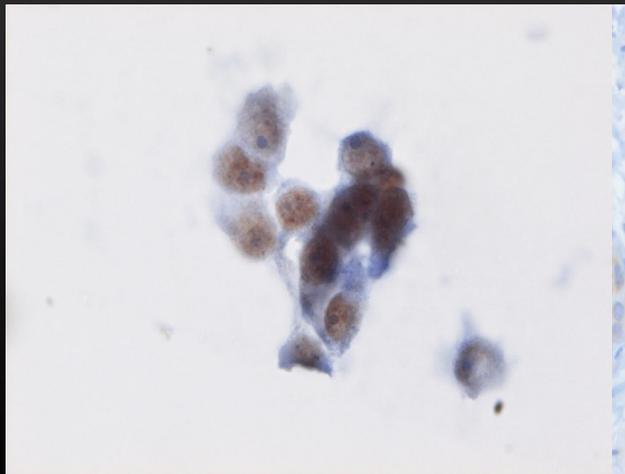
【 細胞診 免疫組織化學染色結果 】



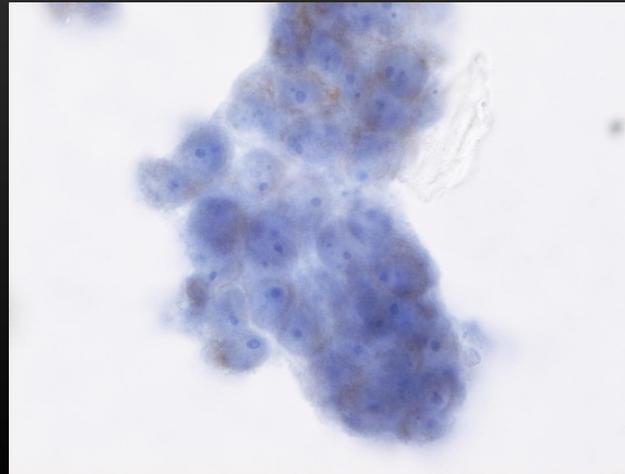
TTF-1 (+)



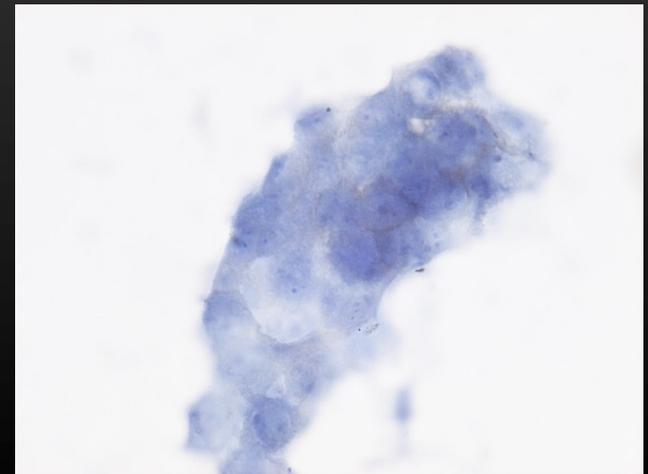
Napsin A (+)



ER (+)



PgR (-)



HER-2 (-)

【 細胞診報告書 】

判定

悪性

細胞診断

Adenocarcinoma

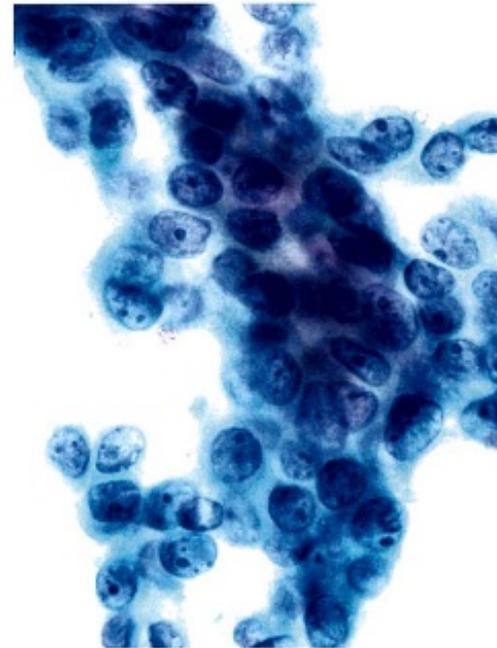
細胞学的所見

*乳腺腫瘍穿刺塗抹標本 2 枚および注射針洗浄液 1 本が検体として提出されました。

標本上に異型細胞の集塊を散在性に認めます (写真)。異型細胞は中～大型で重積性に富み、核大小不同や核形不整や核クロマチン増量があり悪性細胞 (adenocarcinoma) と考えます。

また、肺癌術後ということでもあり細胞転写法にて肺癌マーカーとして TTF-1 を施行したところ大部分の腫瘍細胞核が『陽性』を示しました。

以上の細胞像から肺腺癌由来の可能性がります。引き続きご検討ください。



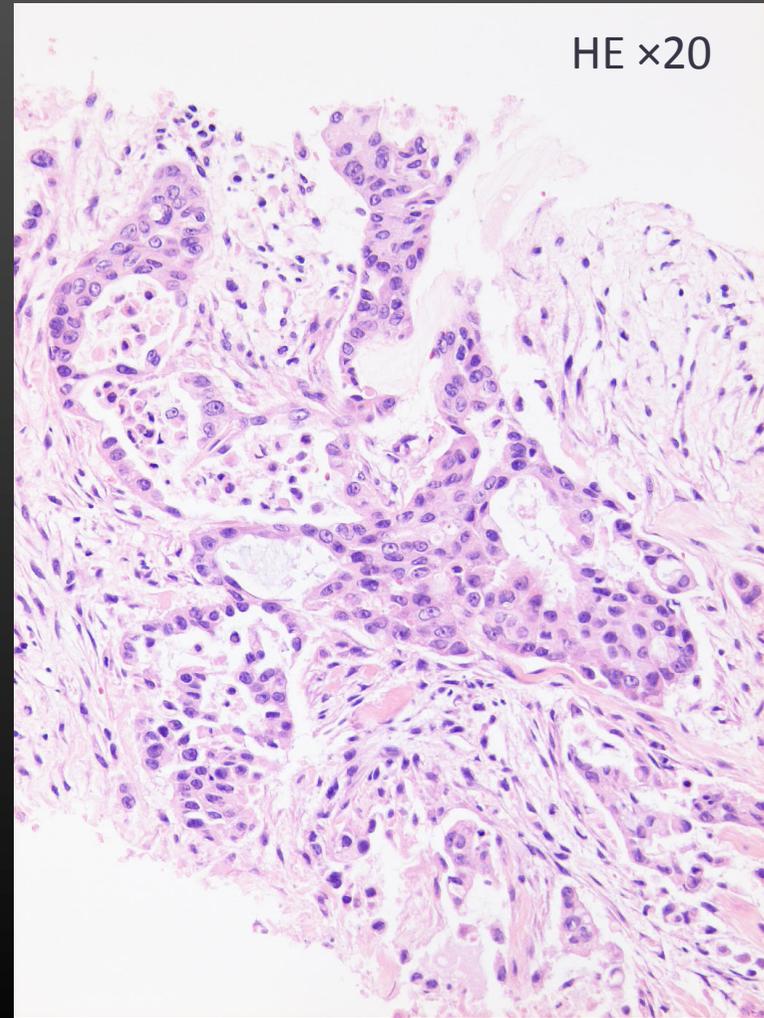
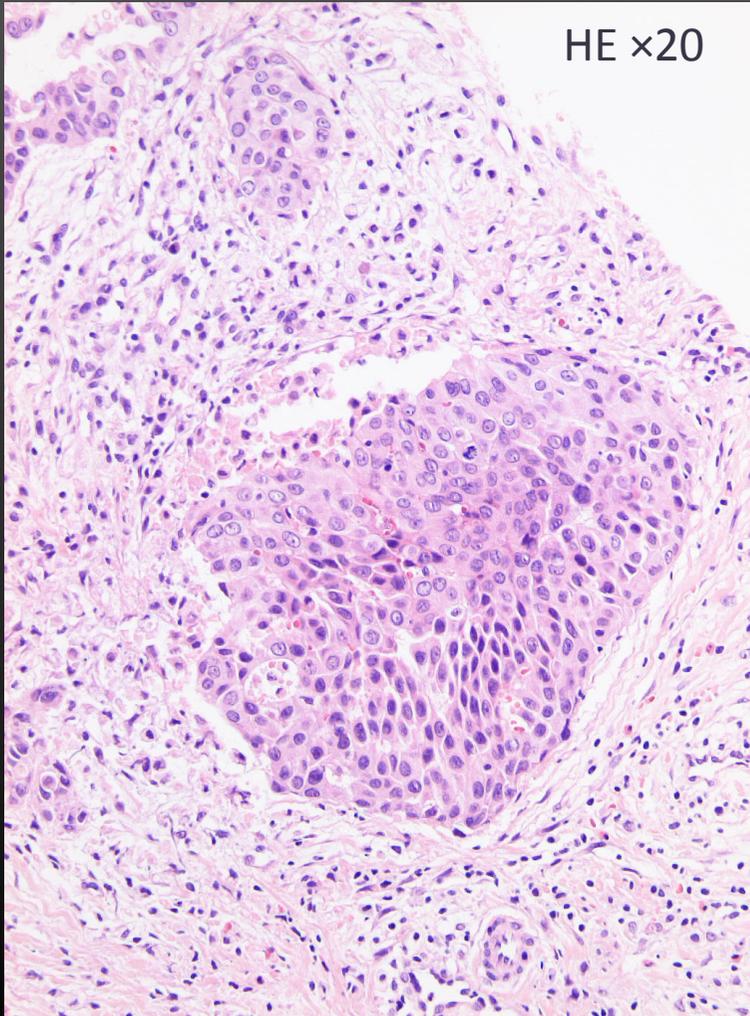
診断者	診断日	2015/05/01	専門医	No.	1515381
-----	-----	------------	-----	-----	---------

AKH (株)秋田病理組織細胞診研究センター

〒010-1211 秋田県秋田市雄和椿川字奥椿岱12-8 結果責任者 阿部一之助
電話 (018)853-5806 FAX (018)853-5816

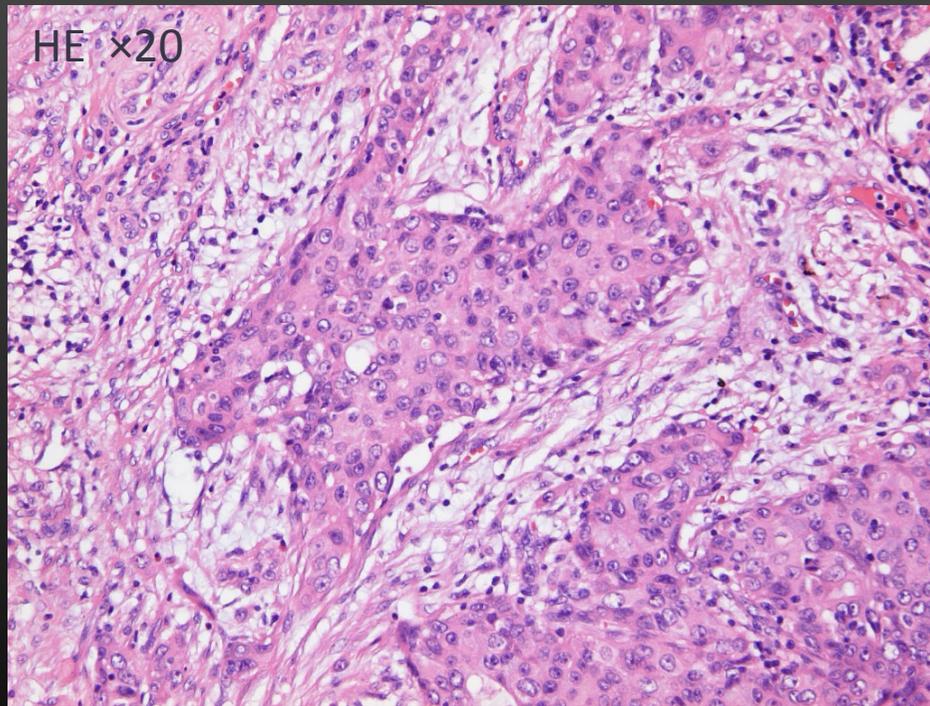


【組織像】

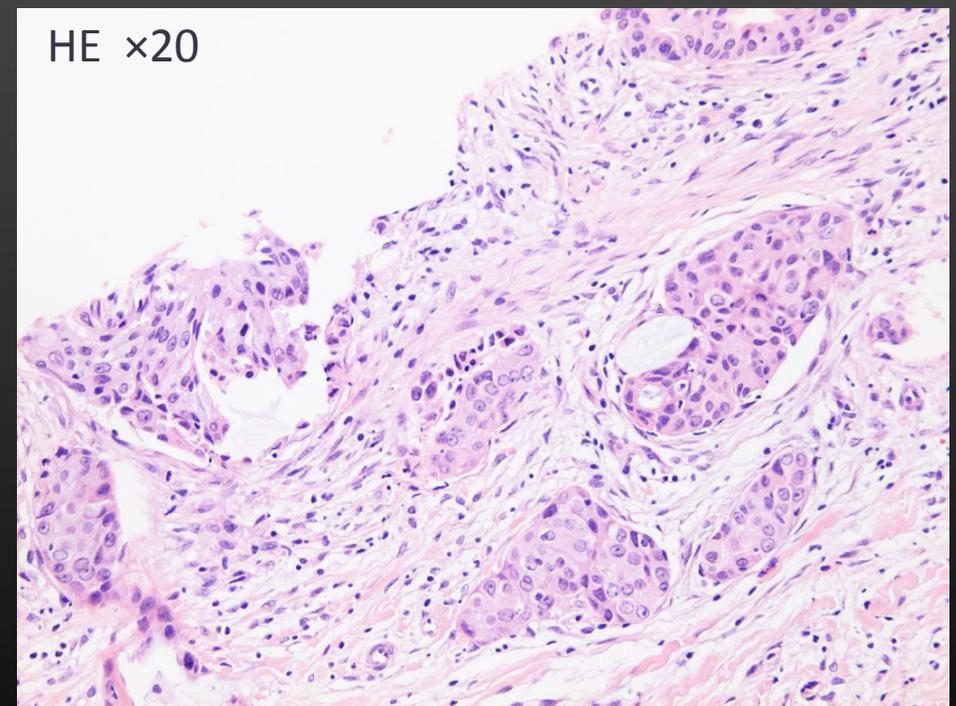


【組織像】

2010年 右肺癌 摘出標本

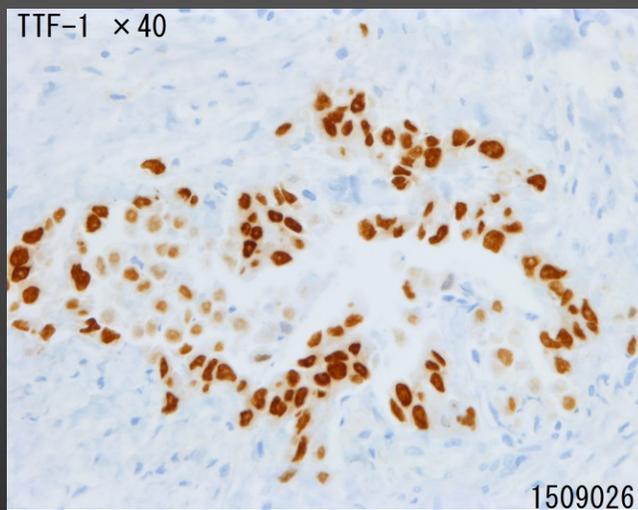


2015年 右乳腺 針生検標本

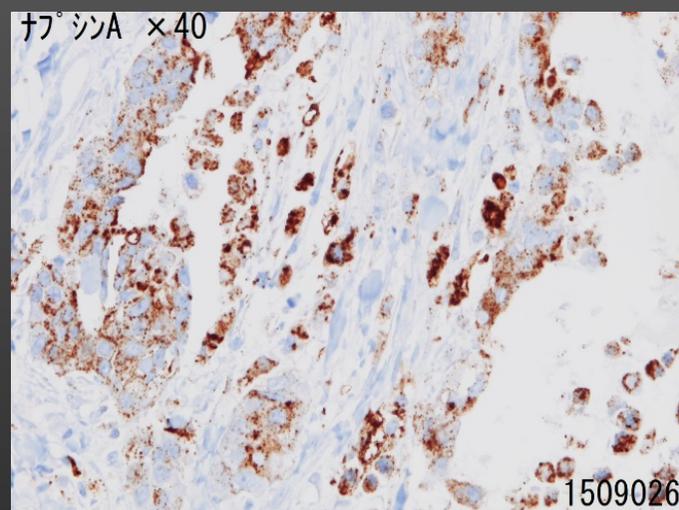


組織像が類似

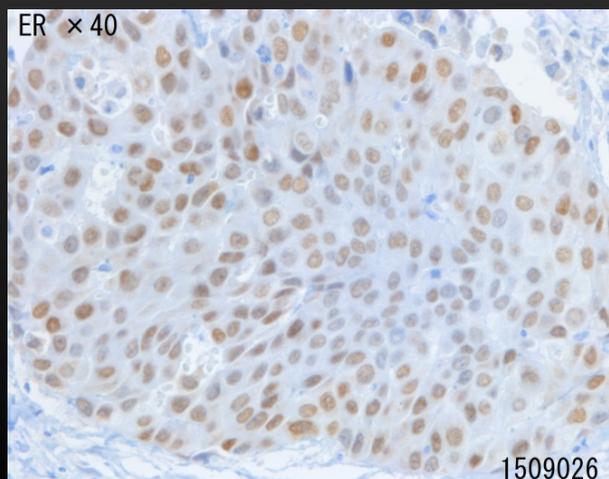
【組織診 免疫組織化学染色結果】



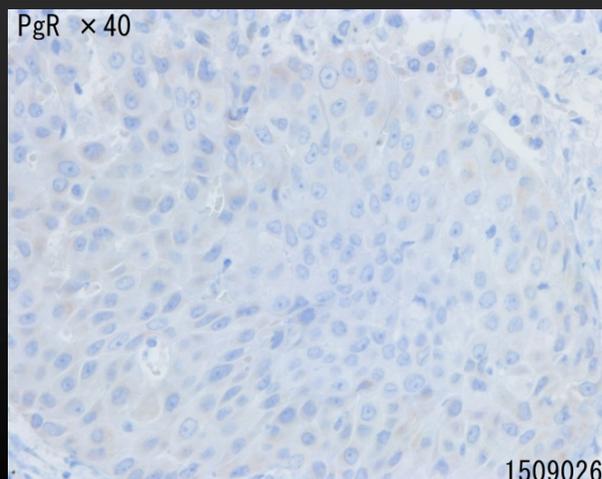
TTF-1 (+)



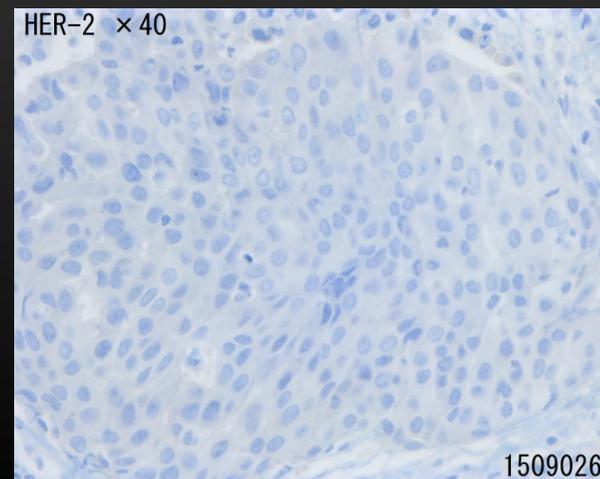
Napsin A (+)



ER (+)



PgR (-)



HER-2 (-)

【まとめ】

- 1) 今回、乳房転移をきたした肺腺癌を経験した。原発性乳癌と転移性乳癌を鑑別することは治療方針を決定する上で重要
- 2) 肺腺癌の乳房転移の診断は細胞像のみでは困難とされ、診断には免疫組織化学染色が有用
- 3) 本症例は細胞診で原発性乳癌を疑ったが、肺腺癌の既往歴があることから、「細胞転写法」を用いて免疫組織学的な検討を行うことにより転移性乳癌と診断
- 4) 細胞転写法は限られた少量の細胞から正確な診断をより迅速に行うために有用であり、診断的利用価値が高い